

氏名	奥西 有理
学位	博士
専門分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第 4311号
学位授与の日付	平成23年3月25日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	留学生との異文化接触場面における日本人ホストの関わり方と関係性形成
学位論文審査委員	主査・教授 田中 共子 教授 長谷川 芳典 教授 小林 孝行 准教授 堤 良一

学位論文内容の要旨

本論文は、日本における留学生交流のホストに注目し、ゲストとの異文化接触と関係性形成について実態を解明した上で、ゲストを異文化適応に導くホストの対応や、ホスト教育の可能性について検討を行ったものである。

第1章は、研究の背景、問題意識と目的を論じた。留学生交流におけるホスト研究を概観し、課題を検討した。日本は国家的戦略として留学生を大量に受け入れる政策を打ち出しているが、留学生交流の持つ国際教育交流としての可能性は十分注目されているとは言いにくい。留学生研究にはゲストの異文化適応を取り扱ったものが多く、ホストの視点からゲストとの関わり方や関係性形成を取り上げた実証研究は少ない。本研究では、ホストの視点からゲストとの関わり方と関係性形成を調べ、ホストが留学生の異文化適応に果たす役割や、将来的なホスト向けの異文化間教育の可能性について論じることを目的とする。

第2章では、ゲストである留学生を対象として、日本における異文化適応に、日本的ソーシャルスキルの行使、語学能力、ソーシャルサポートの受領等の要因がいかに関わるかを検討した。留学生に対するホストからのソーシャルサポート提供が、留学生の日本的ソーシャルスキル実施を促進し、異文化適応へとつながることが確認された。日本語使用の場合と英語使用の場合で、異なる適応経路が見出された。

第3章では、日本人大学生を対象に、ホスト-ゲスト間の支援的関係を分析した。ソーシャルサポートの授受をみると、留学生の異文化適応にホストからの文化的サポートが支援的に働く可能性が示唆された。またホストは、ゲストとの異文化接触において、少なからず異文化葛藤を経験していることが分かった。

第4章では日本人学生を、第5章ではホストファミリーを対象に、異文化葛藤とその対応に関するタイプ分けを試みた。ホストの異文化対応や構築された関係は、必ずしも異文化適応を支援しようとするものではなかった。大学や地域におけるホストは、独自の国際交流観を持ちながら交流を実践していた。異文化接触によって葛藤が生じるという認識を持たずに、国際交流に対する肯定的認知や、外国や英語への興味等を推進力として留学生と関わるホストも少なくなかった。

第6章では、留学生交流における日本人ホストとゲストとの関係性形成、ホストの関わり

り方が留学生の異文化適応に果たす役割、ホストの異文化間対人関係形成上の課題、そしてホストを対象とした異文化間教育の可能性について論じた。日本人ホストが留学生との交流を、外国語や外国情報に触れる機会として狭義にとらえる場合は、留学生に歩み寄る傾向にあり、異文化適応支援には結び付きにくい。ホストが異文化葛藤を認識し乗り越えていること、ホスト文化とゲスト文化について理解を深めていること、ホスト文化説明の技術を持っていること等が、ゲストを適応支援に導ける条件と考えられた。最後に、日本人の心理的次元における異文化対応のスタイルをふまえ、ホストのための異文化間教育の可能性について論じた。

学位論文審査結果の要旨

本研究はこれまであまり注目されることのなかった、在日外国人留学生と関わる日本人ホストに、異文化間心理学と異文化間教育の観点から焦点をあてた意欲作である。質問紙調査と面接調査を用いて、量的・質的手法を組み合わせた統合研究という形で四研究をまとめた章を軸に、序論と総括の章を加えて構成されている。

審査委員会は、社会学、日本語学、心理学の専門家によって構成された。審査会では、本論文に対して、考え方や方法の詳細などを尋ねるほか、学際的な観点からの議論が求められた。まず、移民集団では肯定されると予想される仮説2が留学生集団で不支持だった理由は何か、留学生において属性差がみられたかどうか、留学生の専攻次第で言語の社会的意味が異なる可能性があるのではないかなどが質問された。さらに、厚いデータを評価しつつ、本論文における国際化の定義とそのあり方への筆者の考えや、ホスト社会における異文化接触のインパクトのあり方、適応概念とその操作的定義の詳細、サポートの一致を巡る文化的バランスポイントの定め方などが問われた。そして、ホスト集団とゲスト集団における適応の質、留学生政策とその展開への評価、留学の現状に対する本研究の意義、留学交流における文化学習の意味と役割の不定性への評価、留学生の動機付けによる異文化滞在スタイルの分岐可能性、適応状態との相対的な関係に由来するサポートニーズの継時的変動の可能性などについて、議論が求められた。

方法論や定義などの説明は誠実に行われ、実証研究の立場から正確に考察を述べる努力が認められた。ただし社会的影響に触れる発展的な問いへの応答には課題が残った。期待されたのは、心理学の着想と方法論に基づき、本論文が解明し得た範囲と残された課題の学術的な位置づけを的確に説明し、主題が内包する問題構造への解釈とアプローチの可能性を整理して述べることだが、課題認識への言及に留まることもあった。学術的な議論は更に深める余地があるが、それは未開拓な領域を手がけているためかもしれないと思われる。本研究は、異文化間心理学の丹念な基礎的知見を異文化間教育につなげる一つの試みとして、関連学会では積極的な関心を持って受け止められ、未開拓の領域を前進させる一翼として認知されている。こうした発展性を持つ魅力は、本論文の中に読み取ることができた。

記載を巡る不備が、いくつか指摘された。適応と異文化適応の語が一貫した使い分けをされていないこと、意図が通じにくい複文があること、文化に関する言説が不用意に使用されていること、書類の記載に不備があることなどについて、修正が求められた。

本論文は、博士論文としては十分な水準に達していると考えられた。すでに専門誌に掲載された作品を含めて構成され、投稿中の章も国際学会での発表を経ており、研究の質は一定の評価を得ている。一連の研究から、まとまった主張が展開されている。残る課題に取り組みながら、本研究が新たな研究潮流を推進していくという点で、期待が持てるものと思われる。審査委員会では全員一致で、本論文を博士の学位にふさわしいものと認めた。